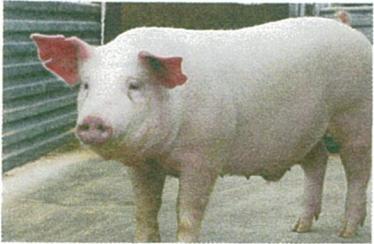


豚肉



和豚もちぶた（群馬県）

しっとりやわらかな肉質と、とろけるような甘い脂。臭みもなく後味はさっぱりしている。

写真提供／グローバルビッグファーム株式会社



平田牧場純粋金華豚（山形県）

幻の豚と呼ばれる希少品種。肉質は絹のようにキメが細かく、しっとり。旨みがたっぷりで上品な甘みが特徴。

写真提供／株式会社平田牧場



TOKYO-X（東京都）

北京黒豚、バークシャー種、デュロック種がベース。上品な香りとさっぱりとした風味が特徴の純血種。

写真提供／株式会社ミート・コンパニオン



平田牧場三元豚（山形県）

キメ細かいながらも、しっかりとした食感でジューシー。あっさりとした上品な甘みが特徴。

写真提供／株式会社平田牧場



アグー豚（沖縄県）

赤身が少なく脂身が多いが、キメが細かくコレステロール値も低い。旨み成分も豊富。

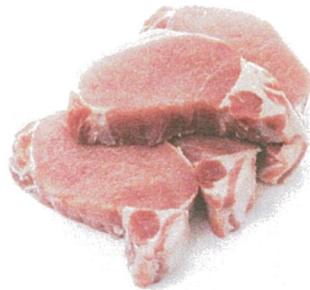
注目の銘柄豚

豚の純粋種：大ヨークシャー、中ヨークシャー、ランドレース、ハンプシャー、バーキャラー、デュロック

和名：豚肉
分類：イノシシ科
おもな産地：鹿児島県、静岡県、群馬県

各地で銘柄豚の飼育も盛んに

『日本書紀』や『万葉集』、『古事記』に猪の記述がありますが、これらは豚を指し、古くから日本で豚が飼育されていたことがわかります。米が神聖化され、肉食が稻作に害をもたらす「けがれ」とみなされるようになると、ほとんどの地域で飼育は一時途絶えますが、沖縄や鹿児島県の奄美では豚の飼育の歴史は長く、もっとも重要な食材として扱われてきました。明治維新以降、コレラ菌の流行で魚の生食が制限されたことにより、安価であった豚肉が注目されるようになりました。現在、豚の品種は30種ほどに増え、ますます味へのこだわりも強くなり、ブランド化される品種も多くなっています。



豚の生態について

野性のイノシシを家畜用に改良した動物です。豚が舎から逃げ出して野生化すると、全身に剛毛が生え、先祖返りしてイノシシ化することもあるとか。体重を増やすために食べ続け、生後180日（バークシャーは240日）前後で精肉になります。また、豚は雑食で野菜や肉、魚、穀物などでも食べますが、嗅覚が鋭く、好き嫌いが激しいことも。

交雑種が主流

いま実際に出回っている肉用豚のほとんどが純粋種の長所を活かした交配の交雑種。三種類の品種を掛け合わせた三元交配種は「三元豚」とよばれ、肉質がよく、繁殖性や産肉性などにも優れています。

豚肉のビタミンB1の含有量は食品の中でもトップクラスで、牛肉の8～10倍といわれています。ビタミンB1は糖質の代謝に欠かせないビタミンで、疲労回復にも役立ちます。B1は水溶性なので、ゆでる、煮るといった調理法だと流れ出てしまいますが、できれば揚げる、焼く、炒めるといった調理方法がおすすめです。煮る場合は汁も残さないようにしましょう。

豚肉はビタミンB1の宝庫